

かつげ川のカメ

「どんな本にしようかな。」

「おとうさんは、『たから島』みたいなぼうけんの話がすきだったなあ。」

そんなことを話しながら、アミが、おとうさんと車で書店に本を買って行ったある日のことでした。かつげ川のていぼうぞいの道を車で走っていると、道の上に石みたいなのが落ちていました。おとうさんは、とっさにハンドルをきってそれをよけました。

「今の、カメだったんじゃないかなあ。」

おとうさんが言いました。

「よくこの道では、カメが、かつげ川から上がってくるんだよ。」

「ふーん。」

(カメだったとしたら、車でひかなくてよかった。でもうごいてなかったから、もうひかれてしんでしまっていたんだろうか。)

そんなことを考えているうちに、車はどんどんすすみ、そのばしよからずいぶんはなれていきました。

アミは、前に家の近くの道で、車にはねられてしんでしまった犬を見たことを思い出していました。ついさっきまでは書店でどんな本を買おうかとうきうきとしていたのに、今は石みたいに見えたもの。ことが気になって気になってしかたがありませんでした。アミはだまって、ずっと考えていました。



「ねえ、おとうさん。」

とうとう、さっきのばしよまで引きかえしてもらおうと、アミがおとうさんにたのもうとしたときでした。ブレーキをかけて車が止まりました。おとうさんがアミを見て言いました。

「さっきのところに もどって みようか。」
「うん！」

(ああ、おとうさんも 同じ^{おな}ことを 考えて いたんだ。)

さっきの ばしょに もどっ
てみると、やっぱり 石に見
えたものは カメでした。じっ
と して いるので しん で し
ま っ て いるのかと 思いまし
たが、見て いると、カメはゴ
ソゴソと 足を出して うごき
出しました。

アミは、そっと カメをもち
上げて、川まで つれて いきま
した。はなして やると、カメは
川に入っ て 元氣^{げん}に およいで
いきました。うれしく なった
アミでしたが、およいで いく
カメを 見ながら 考えこみま
した。おとうさんは、そんな ア
ミを にっこりわらっ て 見て
いました。



○ 石みたいに 見えた ものの ことが 気になっ て しかたが なかった アミ
は、どんな ことを 考えて いたでしよ。

○ およいで いく カメを 見ながら、アミが 考えて いたのは どんな こと
でしよ。